

バスコンセロスの思想と先住民的なもの

——教育・文化政策を通して——

田 中 敬 一

はじめに——1920年代メキシコ社会とインディオ——

ホセ・バスコンセロス (José Vasconcelos, 1882-1959) は1920年代前半、国立大学 Universidad Nacional (現在の国立自治大学、UNAM) の学長としてまた新設された文部省の初代大臣として教育制度の改革に取り組み、一般教育の普及に尽力した。メキシコを代表する文学者オクタビオ・パスはバスコンセロスを「メキシコ近代教育の創始者」と呼び「彼の仕事は短期間であったが実り豊かで、その本質は今日もなお生きている」⁽¹⁾ と記し、その功績を高く評価している。またバスコンセロスは文部大臣在任中 (1921-24年)、国立予科高等学校や新築された文部省の壁面を画家に提供し、これがきっかけとなり壁画運動が始まったことはよく知られている。

さて彼が活躍した1920年代はメキシコにおいては「国家的内省期」una era de introspección nacional⁽²⁾ と呼ばれている。1917年、憲法が公布され、メキシコのあらゆる階層を巻き込んだ革命は一応の終結を見た。そして1920年代に入ると政治家や各界の指導者たちは憲法に成文化された理念に基づき、革命で荒廃した国土の復興に着手する。しかし文化的に異なる3つの国民グループ—白人・クリオーリョ、メスティソ及びインディオ—を一つにまとめ、国家再建の道を歩むことは決して容易ではなかった。しかも彼らは文化的な背景だけでなく、経済的な利害関係も異なっていた。

この国家の発展とその前提となる国民の意識的統一において議論の最大の争点となったのは、国民の約30%を占める先住民インディオの存在であった⁽³⁾。彼らの大部分は自給自足的な農業を営み、非インディオ系住民の搾取の対象となって極貧生活を余儀なくされていた。またその3分の1は全くスペイン語を話さず、国民生活の欄外に置かれていた。こうした状況に対し多くの政治家や思想家は、インディオが国民社会から孤立したままでは国の発展はあり得ないと考えた⁽⁴⁾。

そうした一人にメキシコを代表する人類学者マヌエル・ガミオ (Manuel

Gamio, 1883-1960) がいた。彼は 1916 年『祖国をつくる』*Forjando patria* を上梓し、インディオの国民社会への統合を次のように唱えた。「先住民を白人に統合し、融合することによって統一が達成され、同質な国民が生まれる。また言語を統一することによって文化は一つになる。」⁽⁵⁾ そしてこのインディオの国民統合理論はバスコンセロスにも受け継がれ、メスティン文化をもとにラテンアメリカ全体の統合を唱える文化論『宇宙的人種』*La raza cósmica* (1925) が生まれた。

しかしながらメキシコにおけるインディオの国家統合をめぐる議論において、政治家や指導者の意見は必ずしも一致しなかった。それは理想とするメキシコ社会のモデルが異なっていたためで、歴史家ラモン・エドワード・ルイスは彼らを「ヨーロッパ主義者」*de tendencia europea* と「国民主義者」*los nacionalistas* の二派に分類している⁽⁶⁾。ルイスの言う「ヨーロッパ主義者」とは、ポルフィリオ期と同様、ヨーロッパ文化を基調とした社会を目ざす者で、その代表としてバスコンセロスやアントニオ・カソ (Antonio Caso, 1883-1946) の名を挙げている。一方「国民主義者」はインディオ文化を擁護する立場を取り、ルイスは「インディオ主義者」*indianistas* とも呼んでいるが、その中にガミオや教育者モイセス・サエンス (Moisés Sáenz, 1888-1941) 等がいた。

本稿では「ヨーロッパ主義者」の代表であるバスコンセロスが文部大臣在任中に推進した教育・文化政策について、インディオ及びインディオ的なものがどのように評価され、その政策に取り入れられたか分析する。第一章では一般教育、とりわけインディオに対する教育政策をとりあげる。また第二章では彼が推進し、後援した壁画運動の中でインディオ的なものがどのように利用されたか、リベラとの確執を中心に分析する。そして最後にバスコンセロスの思想においてインディオ的なものがどのように位置づけられているか考察するものである。

I バスコンセロスの教育政策とインディオ

すでに述べたように革命後の政治家や指導者にとって国家の再建と発展は最大の課題であった。しかしそれを達成する上で問題となったのは国民の約 30% を占めるインディオの存在であった。1920 年当時インディオは 80 以上もの部族に分かれ、その大半は相互に意志の疎通ができなかったと

言われている。しかも土着の言語しか話さないインディオは国民生活から切り離されて生きていた。ガミオは『祖国をつくる』の中で先住民の国民社会への統合を訴えたが、彼はその意義について次のように述べている。

「先住民が国民生活に統合されたとき、この国が今日潜在的にまた受動的に秘めている力はダイナミックなエネルギーに変わり、真の国民意識が育つであろう。」⁽⁷⁾ またバスコンセロスはインディオを抱えたメキシコを初めとするラテンアメリカ諸国の危機的状况について次のように記している。「アメリカのほとんどすべての国において先住民集団は文明化された社会と緊密な連絡のないまま生存している。そして帝国主義の勢力はとりわけこうした集団にねらいをつけ、将来自分達に役立つよう自らの手で教育しようと、遠くで待ちかまえている。」⁽⁸⁾

さらに革命後の農村教育の普及に力を尽くしたモイセス・サエンスは国民の意識的統一の必要性について次のように述べている。「我々は何世紀も前に解決しておかねばならなかったことを一世代で解決しなければならず、しかもそれは急を要する。というのも我々の国民意識は外国の脅威にさらされているからだ。活力ある独自の文化、はっきりした輪郭を持つ国民意識が唯一我々をあらゆる種類の帝国主義的侵略から救い、同時に人類の進歩に寄与する貴重な貢献となるであろう。」⁽⁹⁾ このように当時の知識人は帝国主義の脅威を敏感に感じ取っていたことがわかる。また政治家たちも一刻も早くインディオを国民生活に統合し、国民の意識的統一を図ると同時に、浸透してきた資本主義経済の中で優秀な労働力に仕立て上げようと考えていた。

ところでメキシコの国家的発展と国民の統一においても一つ大きな障害があった。それは国民の約80%が文盲であるという事実である。ディアス政権下ではエリート育成のための教育に力点が置かれた。そして一般大衆に対する教育はなおざりにされ、教会の手で細々と営まれていた。またインディオに対しては、教育の機会は無と言ってよかった。革命直後のインディオの教育的状況について、メキシコの歴史家ベラ・エスタニョールは次のように記している。「600万人の先住民のうち2/3は教育を受ける準備ができておらず、200万人はスペイン語を話せない。したがって初等教育は全く受けることができなかった。」⁽¹⁰⁾

こうした状況のもと、1920年5月、カランサ政権が倒れた。バスコンセロスは亡命先のアメリカ合衆国から帰国すると、同年6月オブレゴン大統

領により国立大学の学長に任命された。彼は学長就任演説の中で「貧困と無知は我々の最大の敵で、無知の問題を解決することは我々の責務である」⁽¹¹⁾ と述べ、いち早く識字運動の開始を宣言した。そして廃止された文部省の再建⁽¹²⁾ と国家による一般教育の早期実施を訴えた。またバスコンセロスはメキシコのすべての知識人に対し革命の理念を実現するため学生と共に象牙の塔を出て、一般教育の「十字軍」となるよう鼓舞した⁽¹³⁾。

しかし 1920 年には識字教育にまだ十分な予算が無かった。そこでバスコンセロスは第 1 次世界大戦下のアメリカ合衆国に習い、ボランティア教師を募った。彼らは「名誉教師」profesores honorarios と呼ばれ、学生や主婦、退職した知識人等がこれに応募した。「名誉教師」は都市部を中心に活動し、バスコンセロスの自伝的エッセイ『災難』*El desastre* (1938) には主婦が字の読めない家政婦や近所の人を自宅に集め教えたり、公園で催し物が終わったあと黑板とチョークが取り出され識字教室が始まった話が記されている⁽¹⁴⁾。また読み書きを習得した小学校の 4 年生、5 年生、6 年生の中から「少年軍」ejército infantil が組織され、教師の引率のもと都市近郊の農村に派遣され、識字教育に携わった⁽¹⁵⁾。

そして翌年の 1921 年 7 月、憲法が改正され文部省の設立が決まると、バスコンセロスは初代大臣に就任した。(10 月)彼は文部省の根幹をなす 3 つの局、「学校局」Departamento Escolar、「図書館局」Departamento de Bibliotecas 及び「美術局」Departamento de Bellas Artes を新設し、またこれとは別に識字教育とインディオに対する教育を担当する部局をそれぞれ作った。バスコンセロスの文部省は 1922 年以降、これまでの政権には見られない潤沢な予算が割り当てられ、彼が理想とした一般教育のプログラムが次々に実施された⁽¹⁶⁾。そして彼が文部省を去る前年に当たる 1923 年には、政府(文部省・学校局)の小学校数及びそこで学ぶ児童数は、1920 年に比べ約 1.5 倍の 13,487 校に、また児童数は 678,897 人から 1,044,539 人へと大きく増加した⁽¹⁷⁾。

さて先住民インディオに対する教育については、バスコンセロスは 1922 年に出た文部省の報告書の中で次のように記している。「私は無知なインディオと無知なフランス人農民、あるいは無知なイギリス人農民との間に何ら差異があるとは思えない。彼らはいずれも教育さえ受ければそれぞれの国で文明化された生活の担い手となり、自分の程度に応じて社会の発展に寄与することができる。この理由で私はインディオの問題は純粋に教育

の有無の問題と捉えている。」⁽¹⁸⁾ この言葉に明らかなようにバスコンセロスはいわゆるインディオ問題を教育の機会に起因する問題として捉え、スペイン語さえ習得すれば比較的容易に国民社会に同化することができると考えた。

またインディオに対する教育方法について、バスコンセロスは教育論『ロビンソンからオデッセイアへ』*De Robinsón a Odiseo* (1935) の中で次のように述べている。「我々はこのニセの科学的推論[実証主義に基づく教育論]に反対し、400年前から同じ教室にインディオ、黒人そして白人を集めて教育するスペイン古来のキリスト教方式を支持する。すなわちインディオを彼らだけの学校で教育するアメリカ方式ではなく、インディオを白人と同等に扱い同じ学校に通わせるというクリオーリョ方式を支持する。」⁽¹⁹⁾ バスコンセロスは北米に見られる先住民だけを隔離した教育は人種の分離を引き起こすだけで、国民の意識的統一に何ら益するものはないと主張した。この結果インディオの子どもたちは白人・メスティソの子どもたちと同じ学校で学ぶこととなった。

それでは彼は先住民に対しどのような教育政策を実施したのであろうか。バスコンセロスは文部大臣に就任すると、先住民の教育のため「先住民教育局」Departamento de Educación Indígena を創設した。彼は設立のいきさつについて次のように記している。「先住民教育局はインディオにあらかじめスペイン語を習得させ、彼らが一般の学校へ入学できるよう教育することをその唯一の目的とする。」⁽²⁰⁾ その結果この部局は過渡期的なものとして位置づけられ、またインディオに対してはスペイン語教育が最優先されることとなった。

そしてバスコンセロスは農村部における教育を実施するための事前調査を行った。(1921-22年)次に彼は国立予科高等学校、師範学校及び国立大学の学生を中心にボランティアを募った。彼らはキリスト教の伝道師に因み“maestros misioneros”と呼ばれ、農村部に向かうと就学期の児童数やその村の経済状態を克明に調査報告した。そしてそれぞれの土地のニーズにあった学校(「農村学校」escuela rural)を建設する準備を始めた。同時に「農村学校」で教える教師(「農村教師」maestro rural)の人選と養成に当たった。しかしながらこうして生まれた農村教師は決して十分な訓練を受けておらず、その仕事は多難を極めた。しかし1924年の終わりにはメキシコの農村部に1,089校の農村学校が建てられ、そこで学ぶ児童数はお

よそ 23,000 人に達したと言われている⁽²¹⁾。

また農村学校はインディオの子どもたちにスペイン語を教える場としてだけでなく、インディオを含む農民が国民生活に同化することを助ける文化的施設として位置づけられた。そのため授業には厳密な学習プログラムはなく、子どもたちは周りの教師や大人たちがする仕事を見たり、それに参加することによって自主的に学ぶよう指導された。さらにバスコンセロスは 1923 年、農村の生活向上を目的に、教師と技術指導員からなる「文化使節団」*misiones culturales* を組織し、各地に派遣した。この使節団は地域の特殊性に応じて編成され、予防接種、農業技術の指導、共同体リーダーの養成等を行った。そして農村学校と協力して地域住民の国民社会への統合化を推進した⁽²²⁾。

II バスコンセロスと壁画運動

バスコンセロスは文明論『宇宙的人種』の中で、人間社会は 3 つの社会的段階を経て進化すると説いた。彼はその最初の段階を「物質主義的」段階 *el material o guerrero*、2 番目を「知的」段階 *el intelectual o político*、そして 3 番目の段階を「精神的ないし美学的」段階 *el espiritual o estética* と呼んでいる。そしてこの最後の理想とする段階に到達する一番の近道は「美学」*estética*、すなわち美術や音楽といった芸術を学ぶことであると述べている。また彼は『美的一元論』*El monismo estético* (1918) の中で「美学とは人間が無私のプロセスのなかで最も崇高な状態に到達する道に他ならない」⁽²³⁾ と述べ、芸術の救済的な役割を指摘した。こうした考えのもとバスコンセロスは学校教育において芸術教育を重視し、音楽や美術を初めとするさまざまな芸術活動を文部省をあげて支援した。この章では「バスコンセロスの文化ナショナリズムの計画で最も成果のあった」⁽²⁴⁾ と言われる壁画運動をとりあげ、彼がこの運動とどのように関わり、インディオ的なものをこの運動の中に反映させていったか分析する。

さてメキシコにおける壁画運動の最初の作品は、1922 年ディエゴ・リベラが国立予科高等学校の講堂に描いた「創造」*La Creación* (1921-1922) と言われている⁽²⁵⁾。この作品はバスコンセロスの依頼によって作成され、その際彼は「普遍的なテーマ」で作品を描くよう指示した。そしてこれを受けてリベラは「創造」と題した壁画を制作した。この作品はメ

スティソの姿をした創造主を中央に、それを取り囲むように配置された十数人のメキシコ人が寓意的に描かれている。リベーラはこの作品のテーマについて次のように説明している。「私は土着のインディオから現代のメスティソに至るまで、メキシコ人の血に流れ込んだすべての人種を描くことにより、メキシコ民族の歴史を描こうとした。」⁽²⁶⁾ そしてリベーラは「エンカウステイク」encáustico という技法⁽²⁷⁾ を採用し、完成までに約1年を要した。

しかしながらこのビザンチン的な構図の作品には、とりたててメキシコ的な特徴は見あたらない。実際1923年3月、この作品が一般公開されると大きな議論を呼んだ。批評家の多くはこの作品に好意的でなかった。そして「リベーラは心を込めて描いておらず、他人の思想を描こうとした」⁽²⁸⁾ と述べ、酷評する者もいた。一方依頼者のバスコンセロスも失望を隠せず、後になって次のように記している。「エンカウステイクという技法の派手な宣伝にもかかわらず、仕上がりは気に入らなかった。……また描かれた人物はメキシコの現実から採られたものの、ヨーロッパ人あるいはアジア人と見間違えるほどであった。」⁽²⁹⁾

しかしリベーラの才能を信じたバスコンセロスは彼を見捨てることはなかった。1922年末、バスコンセロスは彼の故郷であるオアハカ州へリベーラを派遣し、「最も美しい先住民が住む」と言われるテウアンテペック地峡部の農村を見せた。バスコンセロスはその動機について次のように記している。「その時私にある考えが浮かび、リベーラに国中をまわる教育使節団の一員としてインディオと交流を持つよう命じた。……リベーラはまだヨーロッパの影響から脱していなかった。」⁽³⁰⁾ バスコンセロスはヨーロッパから帰国したばかりのリベーラはまだメキシコ的なテーマに価値を見いだしていないことに気づいていた。そしてリベーラはこの旅行のあとメキシコの自然やそこに住むインディオの生活をテーマにした作品を次々に発表した。とりわけ彼が新築された文部省の壁面に描いた「砂糖黍搾り」La molienda de la caña de azúcar、「機を織る人」Los tejedores、「読み方を教える女教師」La maestra que enseña a leerは何気ない農村の風景を淡い色彩の中に見事に描写し、彼の名声は不動のものとなった。これまでテウアンテペック旅行はリベーラの画風の転機とされてきたが、この旅行はバスコンセロスによって意図的に計画されたものであった。

またこれに先立ち、バスコンセロスはモンテネグロを初めとする画家を

オアハカ州、ミチョアカン州、ハリスコ州に派遣し、先住民によって作られた漆器や陶器などの民芸品、及びその地方に伝わる民謡や踊りに触れさせた。バスコンセロスはその意図するところを教育論『インド学』*Indología* (1927)の中で次のように記している。「モンテネグロの努力で首都に住む画家のメキシコ内陸部への旅行が実現した。モンテネグロと彼の6人の弟子が参加した最初のオアハカ取材旅行では、先住民の美術から影響を受け、感化される方式が採用された。」⁽³¹⁾ バスコンセロスは単に自然の中に生きるインディオの生活を見せるだけでなく、先住民の芸術に息づく独特な感性を学ばせた。この結果壁画家たちはメキシコの自然やインディオの生活をテーマにした作品を数多く描くようになった。また画家たちは自国の自然や生活に誇りを持ち、それらを真摯に見つめて作品に描いた。

ラテンアメリカ文学者ジーン・フランコはこの画家の新しい傾向について次のように説明している。「文化的ナショナリズムの観点からすれば、壁画家の持つ最も重要な点は、恐らく、国民的なものとインディオ的なものとをほとんど完全に同一化したことであろう。……しかし間もなく、この運動の神話的英雄はそのほとんどがインディオか色の浅黒いメスティン—アステカの皇子クワウテモックから19世紀の英雄ベニト・フワレスに至るまで一となった。こうして正真正銘のメキシコは、コロンブス以前から伝わる伝統を受け継ぐ先住民のメキシコと同一視されるに至った。」⁽³²⁾ しかしながらバスコンセロスの理想とするインディオ像とリベラたち壁画家が描いたインディオのあいだには大きな隔たりがあった。バスコンセロスは画家たちがインディオ的なものをメキシコの歴史の象徴として描くことを期待していた。それは過去の輝かしい文明を生み出したインディオである。ところがリベラたちが描いたインディオは、革命後も変わらず貧困の中につつましく生きる現在のインディオであった。

メキシコの批評家ホアキン・ブランコはインディオ的なものに対するバスコンセロスとリベラの見解の相違について次のように説明している。「バスコンセロスはリベラの『創造』や現在の国立雑誌資料館に描かれたモンテネグロのフレスコ画のように理想化され、幾分神聖化されたインディオのイメージを一般大衆に提示しようとした。……まもなく壁画家たちはこの考えを放棄し、理想化されたものではなく現実の姿を描き始めた。インディオがインディオと同一視されるためにはケツァルコアトルは必要でなく、またチチェン・イツァも必要としなかった。」⁽³³⁾ そしてホアキン・

ブランコはバスコンセロスとディエゴ・リベラを「同じインディヘニスマでも対極に位置する者たち」と呼んだ⁽³⁴⁾。

しかも両者の対立は、1924年、バスコンセロスが大臣の職を辞したときにはもはや修復できないものとなっていた。画家たちは彼らを経済的に支援し、育て、マスコミ等の攻撃から守ってくれたバスコンセロスを当初「パトロン」patrónと呼んでいたが、リベラは彼を「ブルジョワの大臣」el ministro burguésと呼んで揶揄した。バスコンセロスは晩年になってこのときの苦い思い出を次のように回想している。「(文部省の中庭に)国民の祝祭を描いたとき、そのメキシコ的な背景の豊かな色彩にもかかわらず、リベラをはじめとするすべての画家たちは失敗を犯した。私が文部省を去るとき、リベラは当初の計画を捨て、民衆の気を引く政治家どもを擁護し、政権を去っていく我々を描いた品のない風刺画で残りの壁を埋め尽くした。」⁽³⁵⁾

またジーン・フランコは両者のインディオ的なものに対する認識の違いを次のように要約している。「バスコンセロスの文化的ナショナリズムは過去の時代のものであることは明らかであった。……一方リベラは新しい時代の精神を代表していたが、それは国家は民衆であるという考えであった。」⁽³⁶⁾そしてこの背景にはリベラをはじめ多くの画家が共産党に入党し、1922年にはリベラ自ら「技能労働者・画家・彫刻家組合」を結成した事実を忘れてはならない。1923年発せられたの同組合の宣言にはブルジョワジーのための芸術制作を拒否し、先住民の伝統のもとに国民芸術を創造することが高らかに謳われていた。またリベラ本人も後になって絵を描くことの意味について次のように語っている。「私は大地の本当の姿を絵で表現しようと思いました。私の作品が、私が目にしたメキシコの社会生活の鏡となり、また一般大衆が現在置かれている状況を通して未来の可能性をかいま見ることが願っています。私は一般大衆の闘いと希望を集約し、同時に彼らの意識を育て、その社会組織化の助けとなる国民のすべての願いを伝えようと思いました。」⁽³⁷⁾この言葉には社会的役割に目覚めた画家の、一般大衆と共に闘おうとする姿勢がはっきりと現れている。

おわりに——バスコンセロスの思想とインディオ的なもの——

バスコンセロスの思想でユニークな点は、文化をそれを担ってきた人

種・民族との関係で論じていることである。1919年に著した『ヒンドスタン研究』*Estudios indostánicos*では古代ギリシャやインドの文明を歴史・社会的に分析し、その担い手がいずれも混血の民族であることを指摘した。そして彼は「混血の民族だけが偉大な文明を創造することができる」⁽³⁸⁾と結論づけた。またこの論法は『宇宙的人種』(1925)の中でも敷衍され、バスコンセロスはヨーロッパ文明について「蛮族が侵入して土着の人々、ゲール人、イスパニア人、ケルト人、トスカナ人と混血しヨーロッパの国が生まれたが、これが現代文化の源である」⁽³⁹⁾と述べている。

しかしながらバスコンセロスはヨーロッパの白人支配も、これまで栄えた他の民族同様、一時的なものであると言う。そしてヨーロッパ文化は白人の次に栄える「宇宙的人種」、すなわちラテンアメリカのメスティソにとって橋渡しの存在でしかないことを次のように述べている。「白人によって世界はあらゆる人種、あらゆる文化が融合しうる状況へと変わった。白人によって征服され、今日編成された文化はすべての人々が団結し、従来の民族の結実でありあらゆる過去の超克である第五の宇宙的人種を生み出す物質的、精神的基礎を築いた。」⁽⁴⁰⁾ここでバスコンセロスが言うヨーロッパの白人とはスペイン人とイギリス人を指していた。そしてこのあと彼はラテンアメリカ独自の文化がスペイン系白人との混血であるメスティソによって築かれることを高らかに宣言した。

またバスコンセロスは『宇宙的人種』のなかでインディオ人口の多いラテンアメリカ諸国の文化的・経済的遅れを指摘し、その原因は白人との融合がまだ十分に達成されていないことに起因すると述べた。そしてこの遅れを是正する方策について次のように明言した。「インディオの未来への扉は現代文明の扉以外なく、ラテン文明によってすでに地ならしされた道以外にない。」⁽⁴¹⁾すなわちバスコンセロスはインディオを白人と混血させ、社会に統合することによってインディオはメスティソと同じヨーロッパ的な思考を身につけることができると考えた。そしてこうした考えのもと、教育・文化政策を立案し、実行に移したのである。

さてこれまで見てきたように、1920年代前半、バスコンセロスは教育制度の改革と一般教育の普及に力を注いだ。そしてインディオに対してはスペイン語教育を最優先し、国民文化への統合を目ざした。しかし北米に見られるようにインディオだけを切り離して教育することは避けた。インディオのメスティソ化、すなわちメスティソ文化による国民の統一に支障

となると考えたからだ。そこで農村部に建てた「農村学校」ではスペイン語を習得したインディオの子どもたちは白人やメスティソと同じ教室で学ぶこととなった。

また芸術に救済的な役割を見いだしたバスコンセロスは学校における芸術教育を重視し、人間的完成を目指した。同時に彼は国民意識の育成に美術や音楽を利用し、国民の誰もが共有できるいわゆる国民文化を創造しようと考えた。そして国を挙げてさまざまな芸術活動を支援し、その一つに壁画の制作があった。1922年、バスコンセロスは画家たちに公共の建物の壁面を解放し、メキシコ的なテーマを描かせ、国民の意識的統一のシンボルとしようとした。そこでバスコンセロスは画家たちを地方に派遣し、メキシコの自然やインディオの生活・文化に直に触れさせた。その結果リベラたち壁画家の作品にはメキシコ的な、土着のテーマが描かれるようになった。

しかしながらすでに述べた通りリベラたち壁画家が作品に描いたのは、バスコンセロスの期待していたメキシコ国民の象徴としてのインディオではなく、現代に生きる貧しいインディオであった。その背景には画家を取り巻く社会的・思想的状況の変化があった。オロスコは『自伝』のなかで当時の壁画家たちが自覚していたその社会的役割について次のように記している。「彼ら（壁画家）は自分たちの活動する歴史的瞬間や、自分たちの絵画と当時の世界や社会との関係について十分把握していた。」⁽⁴²⁾そして壁画家たちは「土着主義的なテーマ」の他に「歴史的な内容の壁画」を描き、作品には「革命や社会主義を宣伝する傾向」が見られるようになったと述べている⁽⁴³⁾。このように壁画家たちはいち早く時代の息吹を感じ取り、国家再建の道を歩み始めたメキシコの過去と現在をその鋭敏な感覚と力強いタッチで描いていった。

註

- (1) Paz, Octavio, *El laberinto de la soledad*, p. 136.
- (2) Ruiz, Ramón Eduardo, *México 1920-1958 El reto de la pobreza y del analfabetismo*, p. 146.
- (3) 1921年の人口調査によるとメキシコの全人口14,334,780人の29%に相当する4,179,449人が先住民インディオとして計上された。そしてメスティソは8,504,561人(59%)、白人1,404,718人(10%)、その他246,052人(2%)であった。このとき

- 指標となったのは人種(「純粋な先住民」*indígena pura*、「白人と混血した先住民」*indígena mezclada con blanca* 及び「白人」*blanca*)と言語(「スペイン語を話すか否か」、「先住民の言語を話すか否か」)であった。またこの調査は自主申告制で行われた。(Luz María Valdés, *Los indios en los censos de población*, pp. 18-19 y p. 67.)
- (4) 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのメキシコにおけるインディオの国民統合の思想については Luis Villoro, *Los grandes momentos del indigenismo en México* (pp. 209-222) でわかりやすく説明されている。また邦文では拙論、「1920 年代メキシコに見る国民文化の創造」(愛知県立大学外国語学部『紀要』第 33 号、2001 年、pp. 299-316) を参照。
- (5) Gamio, Manuel, *Forjando patria*, p. 10.
- (6) Ruiz, Ramón Fernando, *op. cit.*, p. 147.
- (7) Gamio, Manuel, *op. cit.*, p. 18.
- (8) Vasconcelos, José, *De Robinsón a Odiseo en Obras Completas*, t. II, p. 1604.
- (9) Sáenz, Moisés, *México íntegro*, p. 214, citado por Raúl Mejía Zúñiga en “La escuela que surge de la revolución”, *Historia de la educación pública en México*, p. 186.
- (10) Vera Estañol, Jorge, *La revolución mexicana Orígenes y resultados*, citado por Raúl Mejía Zúñiga en “La escuela que surge de la revolución”, *Historia de la educación pública en México*, p. 187.
- (11) Vasconcelos, José, “Discurso en la Universidad” en *Obras Completas*, t. II, p. 773.
- (12) メキシコではディアス政権下の 1905 年、教育芸術省 *Secretaría de la Educación Pública y Bellas Artes* が創設されたが、1917 年憲法の公布と共に廃止された。またこの部局は法務省 *Secretaría de Justicia* のもとに置かれ、所管は連邦区のみで国家は一般教育に携わらなかった。またバスコンセロスは 1914 年、短命に終わったエウラリオ・グティエレス政権下で教育芸術省の大臣を務めている。
- (13) Vasconcelos, José, “Discurso en la Universidad” en *Obras Completas*, t. II, p. 775.
- (14) Vasconcelos, José, *El desastre*, p. 143.
- (15) 1923 年には 58 の町や村で 5,092 名の小学生が「少年軍」として識字教育に携わっていたと言われている。(Margarita Vera y Cuspinera, *El pensamiento filosófico de Vasconcelos*, p. 38.)
- (16) 1920 年の教育予算は 2,218,000 ペソであったが、1921 年には 5 倍弱の 9,803,000 ペソに、また 1922 年には前年比 5 倍の 49,827,000 ペソ、1923 年には 52,363,000 ペソに大幅に増加された。(Joaquín Blanco, *op. cit.*, p. 92.)
- (17) Blanco, Joaquín, *op. cit.*, p. 91.
- (18) *Boletín de la Secretaría de Educación Pública*, I. No. 3, p. 7, citado por Margarita Vera y Cuspinera, en *El pensamiento filosófico de Vasconcelos*, pp. 36-37.

- (19) Vasconcelos, José, *De Robinsón a Odiseo en Obras Completas*, t. II, pp. 1604-1605.
- (20) Vasconcelos, José, *El desastre*, p. 62.
- (21) INI, *INI 30 años después*, pp. 43-44.
- (22) Fernando Solana y otros (coord.), *Historia de la educación pública en México*, pp. 202-203.
- (23) ジーン・フランコによる要約。(Jean Franco, *La cultura moderna en América Latina*, p. 91.) またバスコンセロスは外国から優れた芸術家や思想家を招き、メキシコの文化に刺激を与えた。その中にはチリのノーベル賞詩人ガブリエラ・ミストラルやペルーの思想家アヤ・デ・ラ・トレ等がいる。
- (24) Franco, Jean, *op. cit.*, p. 92.
- (25) 壁画運動三巨匠の一人、オロスコは『自伝』の中で「壁画は1922年にテーブルの準備が整っていた」と述べ、この運動の素地が1900年から1920年の間にすでにできていたことを指摘している。(José Clemente Orozco, *Autobiografía de José Clemente Orozco*, p. 59.)
- (26) Marnham, Patrick, *Soñar con los ojos abiertos*, p. 203.
- (27) 水溶性の絵具に蜜蠟を混ぜ、下地に定着させる乾式フレスコの技法。(加藤薫『メキシコ壁画運動』pp. 80-86を参照のこと)
- (28) Marnham, Patrick, *op. cit.*, p. 206.
- (29) Vasconcelos, José, *De Robinsón a Odiseo en Obras Completas*, t. II, p. 1676.
- (30) *Ibid.*, p. 1676.
- (31) Vasconcelos, José, *Indología en Obras Completas*, t. II, p. 1256.
- (32) Franco, Jean, *op. cit.*, p. 95.
- (33) Blanco, Joaquín, *op. cit.*, p. 99.
- (34) *Ibid.*, p. 99.
- (35) Vasconcelos, José, *De Robinsón a Odiseo en Obras completas*, t. II, p. 1676.
- (36) Franco, Jean, *op. cit.*, pp. 94-95.
- (37) *Ibid.*, p. 94.
- (38) Vasconcelos, José, *Estudios indostánicos en Obras Completas*, t. III, p. 99.
- (39) Vasconcelos, José, *La raza cósmica en Obras Completas*, t. II, p. 905.
- (40) *Ibid.*, p. 909.
- (41) *Ibid.*, p. 917.
- (42) Clemente Orozco, José, *op. cit.*, p. 61.
- (43) オロスコは1947年に開いた個展のカタログの中で、壁画運動の三つの流れを指摘している。それらは1)「土着主義的」な流れ、2)「歴史的な内容の」壁画、及び3)「革命や社会主義を宣伝する」壁画である。(Jean Franco, *op. cit.*, pp. 163-164.)

参考文献

- Bayón, Damián (Relator), *América Latina en sus artes*, 8a ed., Siglo XXI, 1994
- Charlot, Jean, *The Mexican Mural Renaissance 1920-1925*, Hacker Art Book, New York, 1979
- Clemente Orozco, José, *Autobiografía de José Clemente Orozco*, 8a reimp., Ediciones Era, 1999
- Fell, Claude, *José Vasconcelos Los años del águila*, UNAM, 1989
- Franco, Jean, *La cultura moderna en América Latina*, Grijalbo, 1985
- Gamio, Manuel, *Forjando patria*, 4a ed., Porrúa, 1992
- *Consideraciones sobre el problema indígena*, INI, 1966
- INI, *INI 30 años después*, INI, 1978
- Joaquín Blanco, José, *Se llama Vasconcelos*, 2a reimp., FCE, 1983
- Marnham, Patrick, *Soñar con los ojos abierto Una vida de Diego Rivera*, 1a ed., en español, Plaza y Janés Editores, España, 1999
- Paz, Octavio, *El laberinto de la soledad*, 4a. reimp., FCE, 1976
- Rodríguez, Antonio, *A History of Mexican Mural Painting*, Thames and Hudson, London, 1969
- Rovira Gaspar, Ma. Del Carmen (Coord.), *Una aproximación a la historia de las ideas filosóficas en México. Siglo XIX y principios del XX*, UNAM, 1997
- Ruiz, Ramón Eduardo, *México 1920-1958 El reto de la pobreza y del analfabetismo*, 1ra ed. en español, FCE, 1977
- Solana, Fernando, Raúl Cardiel Reyes, Raúl Bolaños Martínez (Coord.), *Historia de la educación pública en México*, 4a reimp., SEP/FCE, 1996
- Tibol, Raquel, *Palabras de Siqueiros*, FCE, 1996
- Traba, Marta, *Art of Latin America 1900-1980*, John Hopkins University Press, 1994
- Valdés, Luz María, *Los indios en los censos de población*, UNAM, 1995
- Vasconcelos, José, *Obras Completas* (t. II, t. III, t. IV), Libreros Mexicanos Unidos, 1959
- José, *El desastre*, Editorial Trillas, 1998
- Vera y Cuspinera, Margarita, *El pensamiento filosófico de Vasconcelos*, Editorial Extemporáneos, 1979
- Villegas, Abelardo, *La filosofía de lo mexicano*, 2a ed., UNAM, 1979
- Villoro, Luis, *Los grandes momentos del indigenismo en México*, 3a ed., FCE, 1996
- 加藤薫『メキシコ壁画運動——リベラ、オロスコ、シケイロス——』平凡社、1988年
- バスコンセロス『宇宙の人種』(高橋均抄訳)、『現代思想』Vol. 16-10、1988年

バスコンセロスの思想と先住民的なもの

ジーン・フランコ『ラテン・アメリカ——文化と文学』新世界社、1964年
名古屋市美術館『メキシコ・ルネサンス展——オロスコ・リベラ・シケイロス——』（カ
タログ）、1989年

El pensamiento filosófico de Vasconcelos y lo indígena : Política educacional y artística

Keiichi TANAKA

En la primera mitad de la década de los veinte, cuando fue rector de la Universidad Nacional y ministro de la Secretaría de Educación Pública, José Vasconcelos se dedicó a la reforma del sistema educacional de México y a la difusión de la enseñanza pública. Al respecto ha escrito Octavio Paz que “su obra, breve pero fecunda, aún está viva en lo esencial” y lo ha calificado de “fundador de la educación moderna en México”. También es sabido que Vasconcelos estimuló el movimiento muralista, ofreciendo a los pintores paredes de los edificios públicos. En este trabajo analizamos el pensamiento filosófico sobre lo indígena a través de su política de educación (cap. I) y de las artes (cap. II).

Para los políticos y líderes de la época posrevolucionaria uno de los problemas más grandes para el progreso nacional era la existencia de los indígenas, que ocupaban una tercera parte de la población total, inmersos en una extrema pobreza, alejados de la vida nacional. Vasconcelos pensaba que el problema del indio radicaba en su pertenencia a un único *status* y que debían mezclarse con otros grupos étnicos y convertirse en ciudadanos mexicanos, compartiendo la misma cultura. En *La raza cósmica* este autor escribió que “el indio no tiene otra puerta hacia el porvenir que la puerta de la cultura moderna”. Con base en este pensamiento, en 1921, cuando asumió el cargo de ministro de Educación Pública, añadió un nuevo departamento a los tres fundamentales, el de Enseñanza Indígena. Éste, sin embargo, tenía un carácter auxiliar y provisional, ya que según dice el filósofo, “el Departamento Indígena no tenía otro propósito que preparar al indio para el ingreso a las escuelas comunes”. De esta forma se ponía énfasis en la enseñanza del español para los niños indígenas monolingües.

Otra característica de la educación indígena vasconcelina es su viejo sistema cristiano español de reunir y enseñar en la misma aula al indio, al mestizo y al blanco. Vasconcelos rechazó el sistema norteamericano de “reservación”, porque creía que provocaría la separación de castas. Fundó muchas “escuelas rurales” por toda la República, las cuales se convirtieron pronto en sedes de la integración de los indígenas a la vida nacional.

Por otra parte Vasconcelos creyó en la función redentora del arte. En *El monismo estético* escribe que “la estética no es sino un camino por el cual el hombre alcanza el mundo divino de los procesos desinteresados”. Propulsó la educación artística, no sólo para la perfección intelectual de cada ciudadano sino para crear una cultura nacional y fortalecer el sentimiento de nacionalidad entre las masas. Esta es la razón por la cual en 1921 pidió a Diego Rivera que pintara la sala de conferencia de la Escuela Nacional Preparatoria con un tema universal. Rivera aceptó esta oferta y terminó su primera pintura mural titulada *La Creación* en 1922. Sin embargo, en esta obra, que intentó representar la historia racial de México, las figuras no parecían mexicanas. Vasconcelos, insatisfecho, decidió enviar a Rivera al Istmo de Tehuantepec, en el estado de Oaxaca, para “influir y dejarse influir por el arte indígena”, porque “Rivera estaba todavía sin deseuropeizar”. Como deseaba Vasconcelos, este viaje marcó un viraje en la carrera de Rivera, quien empezó a pintar con temas autóctonos mexicanos y con sus obras murales en el nuevo edificio de la Secretaría de Educación Pública en 1923 logró una fama definitiva.

Sin embargo, se produjeron discrepancias entre Vasconcelos y Rivera en torno a lo indígena. Vasconcelos quería presentar a las masas imágenes ideales y hasta divinas de lo indígena. En cambio Rivera y sus colegas muralistas preferían las imágenes realistas. Dice Rivera que “tenía la ambición de reflejar la expresión esencial auténtica de la tierra”. Esto se debe a la ideología socialista de los artistas, que se adherieron al partido comunista y defendieron en su declaración de 1922 un arte para el pueblo y no para los burgueses. De

esta manera se hizo más claro e insalvable el distanciamiento entre Rivera y Vasconcelos, cuando este último dejó la Secretaría en 1924. El crítico mexicano Joaquín Blanco escribe atinadamente que “Vasconcelos y Diero Rivera fueron los polos opuestos del mismo indigenismo”.